

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	白川 ゆう子
主な担当科目	音楽療法各論Ⅲ/音楽療法各論特殊講義Ⅲ
2024年の教育目標・授業に臨む姿勢	コロナ禍以降、低学年の学生たちは高齢者施設に対して、遠隔音楽療法の実践を実施してきた。コロナが5類感染症になったことを受け、より実践的な学びの場を低学年の学生たちに提供したいと考える。音楽を通じて、様々な対象児者と直接ふれあう機会を作ることで、3年次以降の音楽療法実習にスムーズにつながるような縦断的な実践教育を目指す。
2024年の教育に関する自己評価	1年生に対しては、これまで訪問してきた保育園の他、新たに麻生区内の成人の生活介護の通所施設で療法的音楽活動を行うことができた。2年生に対しても、新たに麻生区内の日中一時支援施設での実践の場を開拓することができた。障がい者との関わりが初めての学生たちも多い中で、音楽を通じて交流できたことは、今後の音楽療法の学びへのモチベーションになった。2年生に対しては音楽療法活動を自ら考え実践し、それを改善しさらに実践するというPDCAサイクルに基づいた実践が提供できた。
2024年のFD活動に関する自己評価	全体研修会の中で実施した分科会では、ファシリテーターを務めた。各先生方からは、学生対応に関する率直なご意見をたくさん頂けたことがとても参考になった。大学では手厚い学生支援が受けられるが、社会に出てからは急にその支援が無くなるため、戸惑ったり、適応できない人がいることなど、大学から社会にどうつないでいくか、という課題が出た。支援の質と量を適切に調整する能力が教員にも求められるため、それらについて共有できると良いと考えた。
授業改善のために取り入れた研修内容	学生の得意なこと、苦手なことがそれぞれ異なるため、学生の良い所を伸ばし、苦手なところの能力を高められるような支援ができるように、授業内でも個別の関りを重要視した。特に音楽療法コースは少人数制であることから、それらの対応が可能である。苦手なことに回避的な学生を回避させずに課題に向き合わせるが大変ではあったが、適宜個別対応しながら、欠席回数を増やさないようなサポータティブな声掛けを続けた。

2024 年度(後期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:1801 教員名:白川 ゆう子

1)アンケート結果に対する所見

「音楽療法アンサンブルⅡ」および「施設実習Ⅰ」では、学外の施設のご協力を得て実践的な体験を積むことができた。「音楽療法アンサンブルⅡ」では、保育園での療法的音楽活動に加え、2024 年度からは成人施設での活動も実施し、多様な方々と音楽を通じて交流できた。Q8 (教育目標の達成度)に関しては、他の質問と比べやや低めだったが、全体平均を上回っており、受講生が目的意識を持って授業に臨んでいたことがうかがえる。

「施設実習Ⅰ」では、授業外学修時間は大学平均時間を大きく上回る結果が示された。打ち合わせやロールプレイに取り組む姿勢が見られ、対象の方に向き合う上で不可欠な準備の重要性を実感できたと思う。これらは、3 年生次の「施設実習Ⅱ」への良いステップとなった。授業外学修は負担もあったかと思うが、確実に力になっていることを実感できたのではないだろうか。

一方で、Q6(わかりやすさへの工夫)は全体平均を下回る結果だった。3 年次以降の実践や研究に備えて幅広い内容を扱ったため、難易度が高く感じられた可能性がある。

2)要望への対応・改善方策

自由記述では、「成人対象の音楽療法を、もう少し継続して実施したかった。」とのご意見をいただいた。ありがとうございました。実際のセッション回数は限られてはいるが、その分、事前打ち合わせやプログラム検討、実施後のフィードバックを丁寧に行った。3 年次以降は毎週これらを積み重ねていく。2 年次の「施設実習Ⅰ」では、実戦のみにとどまらず、アセスメントや評価、個別目標の検討など、実習に不可欠なプロセスに重点を置いている。これらの基盤なしには、意味のある音楽療法の提供は成り立たない。3、4 年次での実習をより充実するための重要なプロセスであることをご理解いただきたいと思う。

例年実施していた AED 講習は、実施日程が授業期間内に調整できなかったこと、また音楽療法の実践回数を増やしたことにより時間確保が難しくなったことから取りやめとなったが、別の機会に受講できるような案内を検討する。

3)今後の課題

ディプロマポリシーに向かって各学年で段階的に学びを深めていく。一つ一つのプロセスに意味があることを、授業を通じて明確に伝え、受講生の理解を促していきたいと考える。引き続き、音楽を通じた交流を 1 年生から体験してもらえようようにしたいと考えている。

以 上